日本学校音楽教育実践学会第 29 回全国大会

2024 年 8 月 24 日（土）、25 日（日）の二日間にわたって、広島女学院大学にて、日本学校音楽教育実践学会第 29 回全国大会が開催されました。北は北海道、南は沖縄より全国各地から約 160 名の参加がありました。本学会は音楽教育実践学の研究を推進していることから、参加者の多くは小学校や中学校などの学校教員が多く、日々の実践を研究的にとらえ直し、実践研究の交流をするなど、活発な議論が繰り広げられた大会となりました。

セミナー「領域横断的な視点が切り拓く音楽教育の新たな世界
―その２　理性と感性の接点―」
歌人・細胞生物学　永田紅氏

細胞生物学の研究者であり、若山牧水賞も受賞された歌人でもある、永田紅氏をお迎えし、さまざまな短歌を例に「言葉で表現するということ」について大変興味深いお話をいただきました。短歌はたった三十一文字でありながら、一瞬にして質的世界の共有を可能にします。生活の微細な感情や記憶、光景を言葉にとどめておくことができることから、永田先生はそれを「時間におもりをつける」と表現されていました。また科学者でありながら、短歌づくりもしていた斎藤茂吉や湯川秀樹を例にあげて、人間は人間らしく生きるために、自ら理性と感性の世界のバランスを保っているというエピソードも大変興味深かったです。

後半は、「葉」や「夏」をお題に、会場にいる皆さんと短歌づくりワークショップを楽しみました。作成した短歌は Google フォームに入力し、その場で投影して永田先生からコメントをいただくというデジタル時代ならではの対話も実現しました。短歌づくりでは、日常生活の中のほんの一瞬の、きらきらした質的な経験を思い起こす機会となり、それを言葉にする楽しさを味わうことができました。

課題研究「生成の原理に基づく音楽科授業における教科内容の体系
―その３　教科内容における文化的側面の位置づけ―」

3 年次の今年は「文化的側面」に焦点を当てた発表でした。徳島県の阿波踊り、広島県の江田島八幡宮祭礼神楽を教材として、子どもたちがどのように教材とかかわり、表現鑑賞活動へと展開していくのか、授業映像とともに報告されました。阿波踊りの囃子ことばづくりでは、子どもたちの生命力を引き出し、とても躍動的に囃子立てる子どもの姿が印象的で、郷土の音楽のもつエネルギーのすごさを改めて実感しました。一方、中学校の江田島の神楽の事例では、普段の生活ではあまり意識することになかった地元にある芸能について、音楽科という授業の中で改めて見つめ直し、その歴史的意義や芸能の深みを見出すという、学校教育で伝統芸能を取り上げることの意味について考えさせられました。

参加型教材実験プロジェクトⅠ

中部支部企画「保育・学校教育で扱う歌の特徴や魅力を探る」

中部支部のプロジェクトでは、参加者が幼児・小学校低学年・小学校中学年・小学校高学年・中学校の５つの区分から選択し、４～７人のグループに分かれて歌の特徴や魅力について自由に話し合いました。どのグループも「まずは歌ってみよう」ということで、会場に《春がきた》《とんび》《スキーの歌》などグループそれぞれの歌声が響きました。声を合わせて歌ったことで初対面同士の場も一気に和み、歌ってみて改めて感じた曲の特徴や魅力について、活発な意見交換が始まりました。それぞれのグループにはタブレットが１台配布され、企画支部によって厳選された資料や音声を適宜閲覧、視聴することができました。例えば、幼児対象の《虫のこえ》のグループでは、虫の鳴き声を表す擬音語の歌詞が子どもの興味を引きつける曲の特徴と考え、タブレットで実際の虫の鳴き声を順番に聴いてみました。すると、「この鳴き声が羽をこすりつける音ということに面白さを感じる」という声が上がり、幼児が「こする音」を楽しむ「音探し」や「音遊び」の活動に展開できるのでは、という話になりました。扱う素材は何がいいのか、気に入った音を聴き合う活動や劇あそびに展開できるのでは、など活動の様々なアイデアが出て大いに盛り上がりました。

最後にグループで話し合った内容を交流する時間が設けられました。中学校対象の《早春賦》のグループからは「子どもにとって跳躍が続いて歌いにくいと思われる箇所をなだらかで歌いやすい旋律に変えて歌ってみたところ、物足りなさを感じた」と歌の比較聴取を含めた発表がありました。このように実験的な取り組みを通して参加者が子どもの歌の特徴とその魅力を再発見した有意義な時間となりました。

参加型教材実験プロジェクトⅡ

四国支部企画「奏法と音色の追究から生まれる箏の魅力 ―《うさぎ》を教材に―」

参加型教材実験プロジェクトの醍醐味は、実際に音や音楽と直接相互作用しながら、その教材のもつ特性や魅力について考える点にあります。こちらのプロジェクトでは参加者の目の前にお箏が置かれ、「触ってみたい！」という衝動にかられて、音探究が始まりました。一音ずつ丁寧に絃を弾く弾き方もあれば、擦ってみたり、はじいてみたり、押してみたり・・・制約もなく、自由自在に音を探究してよいという時間が与えられた参加者は、絃だけでなく、胴を叩いてみたりするなど、さまざまなアイデアを試しながら音探究に没頭しました。そのようにして見つけた音に対して、箏演奏家でもある遠藤綾子会員が「これは実は◯◯という奏法で・・・・という曲にも使われています」とコメントすることで、偶然に見つけた音に意味がもたらされる瞬間もありました。後半は《うさぎ》を用いて、一つのお箏に３～５人がよってたかってアレンジを加えるという活動が行われました。前奏後奏をつけるグループやリズム伴奏やオスティナートをつけるグループもあり、発表では共感あり、感嘆ありの大変充実した時間となりました。

一通りの活動を終えたあとは、教材としての特性や魅力を言語化する時間が与えられ、お箏のもつ自由自在さが探究の広がりをもたらすこと、また《うさぎ》というあるテーマがあるとイメージの根拠ができてアレンジがしやすくなるなどの発見がありました。